

Title	フィットネス・シンドローム： 身体の最適化への欲望と産業社会への移行期のアメリカにおける食、スポーツ、宗教
Sub Title	
Author	鈴木, 透(Suzuki, Toru)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の教養学：慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008.) ,p.337- 352
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88455348-00000012-0337

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フィットネス・シンドローム
——身体の最適化への欲望と産業社会への移行期の
アメリカにおける食、スポーツ、宗教——

鈴木 透

- I はじめに
- II 脅かされる身体
- III 身体を救う食とスポーツ
- IV 宗教の新たな役割
- V 結語

I はじめに

南北戦争の終結（1865年）から1920年代にかけての産業社会への移行期が、現代アメリカの原型を形作った時代であるという認識は、多くのアメリカ研究者に共有されている見方である。しかしながら、南北戦争の段階ではまだ後進的農業国の状態に留まっていたアメリカが、1880年代にはイギリスを抜いて世界最大の工業国となり、第一次世界大戦後には人類史上未曾有の経済的繁栄を手にし、今日の高度消費社会の入り口にまでたどりついていたという事実を改めて振り返る時、産業社会への移行がなぜアメリカではこれほど急激かつ劇的に進んだのかという点については、まだまだ検討の余地が残っているといえる。こうした急激な変化の原因を、資本家の登場や資源の存在、移民労働力の流入といった工業化の原動力となったような経済的要因にすべて帰するのは難しい。むしろ、産業社会への急速な移行は、それだけ人々が新たな価値観やライフスタイルを受け入れたからこそ達成されたと考えべきであり、何が人々を産業社会へと適合させる導き手となったのかという点に相応の関心を払う必要がある。実際、これだけハイペースの激変の背後には、何らかの強迫観念めいたものが社会全体を覆っていたと考える方がかえって自然である。しかしながら、人々を駆り立てた、強迫観念にも似た発想の正体がいったい何なのか、それを社会に流通させたメカニズムとはどのようなものだったのかについて、研究者の間に統一見解が存在するとは言いがたい。

筆者は、現代アメリカの原型が登場したというべき産業社会への移行期にかねてから関心を持ち、この時代の持つ歴史的意味に関連する論考を既にくつか発表してきた。例えば、「時計、石鯨、星条旗：産業社会の出現とアメリカ的身体の形成過程」（2005）においては、南北戦争によって決定的となった「神の時間」から「機械時間」へという時間概念の変化と、公衆衛生に対する意識の高まり、更には移民労働者を意識した愛国主義運動の高まりという三つの要因が、産業社会に相応しいアメリカ人像を規定する効果をもたらし、奴隷制度をめぐる国家の分裂に伴う理想のアメリカ人像の空白を埋める形で、「アメリカ人」の自画像を鮮明にしていた点を指摘するととも

に、それは、安価に生産された「モノ」（時計、石鹸、星条旗）を身体に装着しない身体と一体化していくプロセスを伴っていたことを論じた⁽¹⁾。

つまり、産業社会への急速な移行と移民労働者という他者との出会いが同時進行していたアメリカにおいては、理念よりも安価に大量生産された「モノ」と自分の「身体」を直結することでアメリカ人としてのアイデンティティを再規定しようとする動きが見られたのであり、そこでは、産業社会に相応しい人間像こそが理想のアメリカ人像だという、ある種のすり替えが起こっていたといえる。しかし、同時にそれは、理念や価値観を長い時間かけて理解するのよりもはるかに簡素化された手続きによって、産業社会アメリカの一員たるメンバーシップが想定されていたことを意味する。換言すれば、何らかの「モノ」を通じてアメリカ社会に相応しい形に「身体」を最適化するという発想こそ、産業社会へと人々を急速かつ効率的に取り込んでいく際の重要な基盤となっていたと考えることができるのである。とすれば、この時代に「身体の最適化」という考え方がなぜそもそも広まっていたのか、それには何が関与していたのかを明らかにすることができれば、産業社会へとなぜアメリカが急速に移行できたのか、そのメカニズムの解明に一步近づけるはずである。

そこで小論では、産業社会への急速な移行には、ある種の強迫観念めいた「身体の最適化」への欲望が社会全体に広まっていたことが関係しているのではないかという観点に立って、そうした発想が何によって増幅されていたのかを検討する。ここでは、まず、「身体の最適化」という発想がある種の強迫観念と化していく背景には、公衆衛生に対する意識の高まりや労働環境の変化、さらには社会進化論的な適者生存の原理に対する信奉などが関係していたことに言及し、「身体の最適化」への対策としてこの時代に食とスポーツの領域に重要な変化が見られたことを指摘する。さらに、そうした変化には宗教が深く関わっていた点を論じ、「身体の最適化」を実現しようとするメカニズムが社会の様々な領域を巻き込んでいた様子を明らかにする。そして、フィットネス・シンドロームとでもいうべき身体の最適化への欲望の組織化こそが、産業社会への急速な移行を支えた重要な原動力だった可能性を提起したい。

II 脅かされる身体

産業社会への移行が生命への危機意識の高まりと並行関係にあった様子は、19世紀後半から20世紀前半にかけての公衆衛生運動の高まりに顕著に現れている。これには、南北戦争での経験が深く関係している⁽²⁾。

南北戦争は、62万人もの死者を出したが、戦闘による死者よりも、病死した者の方がはるかに多かった。実際、連邦政府は、野営地の不衛生を早くから懸念し、開戦直後の1861年6月にアメリカ衛生委員会という組織を立ち上げ、ニューヨークのセントラルパークの設計で知られるフレデリック・ロウ・オルムステッドを中心に、改善策を検討させている。当時は、細菌感染に対する知識が確立されておらず、不衛生や不潔が死に結びつくと信じられていた。しかし、その問題の解決のためにオルムステッドが起用されたという事実は、戦場の衛生状態の改善と都市の環境改善とが当初から密接に関連していた様子を映し出している。

実際、19世紀後半の都市を舞台とする公衆衛生運動や美化運動は、不衛生と戦った南北戦争の野営地での原体験を引き継いだものといえる。しかし、都市部のインフラの整備は、工業化に伴う急速な人口の流入にはすぐには追いつかず、都市の衛生状態は、なかなか改善されなかった。そのような中で、19世紀後半のアメリカの都市では、各地で伝染病が猛威を振るった。ニューヨークでのコレラの蔓延（1866）やメンフィスでの黄熱病の流行（1873）をはじめとして、一度に数百人から千人単位での死者が出たことは、都市の不衛生は生命を脅かしかねないという不安を煽るものとなった。実際、メンフィスでは当時の同市の人口の五分の二にも及ぶ二千人の犠牲者が出た。長い航海の末に衛生状態の悪いまま大量の低賃金移民労働者が都市に流入してくるという事態は、そうした恐怖感をさらに増幅した。不衛生は、生存のために撲滅しなくてはならない対象として意識されるようになったのである。

このことは、19世紀末の公衆衛生運動に、しばしば軍隊的なモデルが登場することと符合する。例えば、ジョージ・ウェアリングが主導したニューヨークにおける道路清掃活動においては、子どもたちに白い服を着せて旗を持たせ、軍隊のように整列して通りを行進するというセレモニーが、人々の

注意を喚起するために行なわれていたし、子どもへの衛生教育が普及していく過程では、校庭に生徒を整列させ、「歯ブラシ隊」なる名称の下に全員で歯を磨くことも行なわれた。こうした事例は、不衛生との戦いが、いわば軍隊の戦いに相当する「命をかけた」ものであるという発想を根底に含んでいた様子を暗示する。その見地からすれば、当時の公衆衛生運動は、不衛生を「敵」とみなし、撲滅しなければ自らが滅ぶかも知れないという強迫観念に突き動かされていたとって過言ではあるまい。

こうした不衛生への強迫観念は、20世紀に入ると次第に軍隊モデルから広告へと引き継がれていく。新たに開発された衛生グッズを普及させようと、広告を通じて次第に衛生基準は吊り上げられていった。広告は、新製品を次々に使いこなしていかないと健康に悪いのではないかという不安感を煽り、不衛生に対する防備の強化には手拔きができないという感覚を人々に植え付けることに成功したといえる⁽³⁾。

生命が脅かされているという認識と、危険を徹底的に回避しようとする防衛本能は、このように産業社会の進展の過程で脈々と受け継がれていった。だが、生命の危険を回避することだけに専念しては、産業社会という新たな時代に適応することはできない。それゆえ、不衛生がもたらす死への恐怖を乗り越えようとする発想は、産業社会に適した身体の模索という次元へと接続されていたとしても何ら不思議ではない。

現に、産業社会への移行は、ライフスタイルの大きな変化を伴っていた。農業社会や家内制手工業の時代には、住居と仕事場は近接していた。労働時間も、各自の裁量で決められる余地が大きかった。しかし、産業社会の典型的な労働形態となった工場労働は、通勤という新たな習慣をもたらすとともに、農業労働に比べると体力は要しないが単調な仕事を決められた時間だけ行なうという新たな労働の形式を普及させた。通勤時間というそれまでにはほとんど考慮する必要のなかった時間を確保するために、人々の生活時間は圧迫されることになった。と同時に、決められた勤務時間に合わせなければならないという事態は、他者の都合に合わせて体調の維持管理をしなければならない時代が到来したことを物語っていた。

しかも、産業社会への移行は、アメリカにおいては自由放任主義の市場原

理と歩調を合わせたものだった。従来から政府の権限が肥大化して圧政へと転化することを恐れてきたアメリカでは、経済活動には極力政府は介入すべきではないとの見地から、自由放任主義が信奉されてきた。そして、ダーウィンの進化論が発表されると、それが示唆していた適者生存の原理は人間の社会活動にも当てはまるという、スペンサー流の社会進化論の考え方が広く受け入れられていった。それは、産業社会に適合できない人間にはいずれ破滅の運命が待っているという弱肉強食の世界観であり、産業社会に適合することは、生き残るための至上命題ともなったのである。

さらに、社会進化論的な適者生存の原理は、しばしば優生学的発想へと発展し、子孫が退化していくことへの懸念へとつながっていった。その様子を顕著に示している事例の一つは、シャーロット・パーキンス・ギルマンの『女性と経済』（1898）であろう。この中でギルマンは、家庭という領域に女性が閉じ込められることによって女性の自己実現が妨げられ、女性の能力が衰退していくことへの危機感を表明するとともに、結果的にそれは大多数の子孫の退化をもたらし、人類の破滅につながるという危機意識を表明している⁽⁴⁾。もっとも、こうした論理は、女性解放の論理の正当性を訴えるために用いられていると見ることもできるが、そうした論理が説得力をもちえたという事実は、それだけ適者生存の原理に対する強迫観念が社会を覆っていたことを暗示しているのである。

こうして、生活時間が圧迫される一方、社会の都合に合わせて健康を管理しなくてはならなくなった人々は、限られた時間の中で働ける状態に体を調整できなければ落伍者になってしまうという恐怖に襲われた。死をもたらすと考えられていた不衛生と戦うことに加えて、産業社会の生活リズムや労働形態に適合し、競争社会を生き抜くための健康管理が求められるようになったのである。それは、不衛生が引き起こす死の脅威に加えて、産業社会に体が適合できなくなることへの不安という、新たな心配の種が増えたことを物語っていた。不衛生に対する強迫観念と社会進化論的な適者生存の拡大解釈によって、産業社会の生は、身体をめぐる恐怖と背中合わせの存在となっていったのである。

Ⅲ 身体を救う食とスポーツ

このように、身体が脅かされているという恐怖感をいかに払拭し、産業社会を生き延びるためにどう身体を最適化するかは、産業社会への移行期の重要な社会的関心事になりえたといえる。しかし、工場労働においては週48時間労働が珍しくなかった当時、身体のお最適化は限られた時間で効率的に行なわざるをえなかった。つまり、勤務時間以外の限られた時間帯をどう健康増進に役立てるかが問題となったのである。ここで興味深いのは、まさにこうした課題の登場と符合するかのよう、食事や余暇の面で、健康増進の発想が産業社会への移行とともに高まっていった形跡が見られる点である。

食の面では、その様子が最も顕著に現れていたのは朝食に生じた変化である。現在でも「アメリカン・ブレイクファスト」といえば、ヨーロッパ大陸式の「コンチネンタル」のような簡便な朝食と異なり、ソーセージやベーコンなどの肉料理と卵料理を伴う、かなり本格的な朝食のことを指す。しかし、歴史上このような豪華な食事がアメリカ社会の一般的な朝食だったのかというと、決してそうではない。植民地時代はまだ食料供給が不安定であり、豪華な朝食を取るという習慣は確立されていなかった。この種の豪華な朝食のスタイルが普及していたのは、西部開拓時代の農家においてであった。農作業は体力を必要とし、また、昼間に作業を中断して十分な昼食を取れるかどうかわからなかったため、農家ではしっかりと朝食を取る習慣が作られたのである。

しかし、農業社会から産業社会への移行は、こうした農場式の朝食の習慣に逆行する部分を持っていた。通勤時間という新たな時間が必要になったために、準備を含めて朝食にかけられる時間は圧縮された。また、農作業と違って、単純作業やデスクワークが増えた結果、がっちりした朝食を取るに見合うような体を動かす機会は減少した。実際、19世紀後半の産業社会への移行期には、病気の中では消化不良が最も多かった。そのため、消化を促進するための薬のような役割をする補助食品が求められるようになり、それは結果的に清涼飲料の発達を促した。元来炭酸水は、安全な水の確保が難しかった西洋世界においては、病人が飲む安全な水という、いわば医療用食品と

しての性格を有していたが、それに様々なフレーバーをドラッグストアの薬剤師たちが加えて商品化したのである。実際、コココーラが1886年に発売された時には、薬としての特許を持っていたし、その前年に発売された「ドクター・ペッパー」も、おなかの調子を整える効能があるとされた。コココーラと並ぶコーラの製造会社となる「ペプシ」の名も、「ペプシン」という消化を促進する酵素の名を連想させるものである。

消化を助けるために医療用に使われてきた炭酸水を商品化するという19世紀後半に活発になった動きは、産業社会への移行に伴って消化不良への懸念が強まっていた様子を物語っている。しかし、それを根本的に解決するためには、そもそも朝食の取り方を変える必要があることに着目する人物が登場してくる。それこそ、シリアルの提唱者となる、ジョン・ハーヴィー・ケログである。

ケログはセヴンス・デイ・アドヴェンティストというプロテスタントの新興宗教の熱心な信者で、医学を専攻した後、ミシガン州バトルクリークで水治療のクリニックを開業する。水治療とは、今日のスパのような温泉療法と食事療法を組み合わせたものだったが、ケログの患者には比較的年齢の高い患者が多かった。それらの患者の中には、歯が退化し十分にものを噛み切れない人もいた。自らが属する宗派が菜食主義を提唱していたことから、かねてより食事や栄養の問題に強い関心を持っていた彼は、噛みやすかつ消化によい食品の必要性を痛感し、穀物を食べやすい形状に加工する技術の開発に取り組んだ。後にケログ社の主力商品となる食べ物であるグラノーラ、シリアル、コーンフレークなどは、こうした過程で1880年代から1890年代にかけて開発されたものであったが、ケログはこれらを病人専用の食べ物とは決して考えなかった。牛乳をかければ簡単に食べられるこれらの新しい食べ物が、食物繊維を効率的に摂取し、体の調子を整えて消化と便通を助ける効果があることに着目した彼は、これらが時間に追われた産業社会の勤労者の朝食に理想的だと考えたのである。ケログは、各地を講演旅行して自らの信念を説いて回り、これらの新たな食品の普及に努めた。そして、医学的効能と利便性を兼ね備えたこの健康食品は、産業社会の新たな朝食として受け入れられることになったのである。

ケロッグが引き起こした朝食革命は、産業社会の勤労者たるに相応しい状態へと身体を最適化しようとする発想が、食事という勤務時間以外の生活領域に浸透しつつあったことを示唆している。現に、食事の形式が産業社会を生き抜くための身体最適化という目標の下に再編成されつつあったのと同様、娯楽にも変化が起き始める。とりわけ、健康増進に直結するスポーツの領域に生じた変化は、身体最適化の発想との関連性が顕著である。

19世紀の後半は、アメリカにおけるスポーツの近代化が加速した時期であった。そこでは、各競技のルールの整備とプロ化が推し進められるとともに、スポーツを単なる暇つぶしの娯楽以上のものとみなし、スポーツの持つ社会的有用性を強く意識する発想が顕著になってくる。同時にそれは、スポーツと教育が接近し、社会が必要とする人材の育成にスポーツを役立てるという考え方を強めることにもなった。

このことを如実に物語っているのが、アメリカン・フットボールの歩みである。ラグビー式フットボールにダウンという制度を導入することによって全てがセットプレーとなったアメリカン・フットボールでは、攻撃・守備ともにプレーを予めデザインし、各プレーヤーが決められたとおりの動きを体に覚えこませることを競うようになる。その結果、アメリカン・フットボールは、相手の攻撃体型や守備体型を事前に研究して最も効果的なプレーを考案し、どのような状況でどんなプレーを選択するか、綿密な計画を事前に練り上げる競技になっていった。それは、相手の出方を予測し、偶然という要素を極力排除し、予測可能性を最大限にしようとする発想を体現している点で、産業社会の企業活動の基本姿勢に通底するものがある。実際、当初は死者を出すほどの粗暴性ゆえに非難を浴びることの多かったこの競技は、市場調査に通ずる事前調査や効果的な戦略の立案、目標を達成するために各自が組織的に行動するという集团的協調性に加え、強靱な肉体を育てるという意味において、企業という組織が必要とする様々な能力をトレーニングするのに適していると考えられるようになる。20世紀初頭以降、この競技がアメリカの大学の花形競技としての地位を手にしたのは、それだけこの競技が産業社会の企業戦士の予備軍の養成過程に相応しいと考えられるようになったことと決して無関係ではない。さらに、アメリカン・フットボールは、自

分を犠牲にしてもボールを生かすというプレースタイルや陣取りゲームとしての色彩が、戦争を擬似体験する上で効果的だと考えられるようになり、第一次世界大戦期には軍事教練にも取り入れられていく。南北戦争を重要な発火点とする公衆衛生運動がある種の軍隊モデルを志向していったのと符合するかのようになり、スポーツと軍隊との接近が起こったのである⁽⁵⁾。

しかしながら、アメリカン・フットボールの教育的効能が産業界からも軍からも認められるようになったとはいえ、それはあくまで男子の競技であり、舞台も中上流階級の子弟の通う大学が中心だった点では、この時代に生じた、身体的最適化の発想のスポーツへの広まりという現象の一部を表しているに過ぎないともいえる。アメリカン・フットボールが排除した女性や庶民にも開かれた形でスポーツを通じた身体的最適化という発想を社会に広めることになったのは、むしろバスケットボールであった。

バスケットボールは、1891年にマサチューセッツ州スプリングフィールドのYMCAの体育教師、ジェイムズ・ネイスミスによって考案された競技である。彼は、外が雪で使えない冬場には、室内で体操などの授業をしていたが、生徒のやる気を引き出すためには、何か別の新たな競技が必要だと考え、これを考案したのだった。狭い場所でもある程度の激しい動きを必要とするバスケットボールは、体操などと比べて得点を競い合うという楽しみもあり、冬場でも室内で手軽に楽しむにはうってつけだった。

しかし、バスケットボールは、発明当初から冬場の競技という枠を超えて爆発的に普及していった。とりわけ、女性や移民といった、それまでスポーツの近代化の過程で必ずしも恩恵を受けていなかった層では、場所も設備もかからないバスケットボールは、娯楽と体力増進を兼ね備えた手軽な競技として人気を博するようになる。

シリアルとバスケットボールの普及という現象が19世紀末にほぼ時を同じくして起こったという事実は、単なる偶然以上のものを含んでいると考えられるべきだろう。勤務時間以外の食事と余暇に属するこれら二つの現象には、様々な共通点が見られるからだ。まず、両者には、より少ない時間と労力で効率的に健康を増進しようとする発想が共通している。シリアルは面倒な朝食の準備を省きつつ消化を助ける食品であり、バスケットボールは大掛かり

な設備や広い場所も必要とせず、冬場に室内でも楽しめる。また、両者とも社会的弱者に対しても強い浸透力を持つ。シリアルは勤労者の朝食としてのみならず、病気の人や歯が退化した人にも対応した食品であり、バスケットボールは、それまでアメリカのスポーツの拠点だった大学から締め出されていたような移民や女性といった層が手軽に参入できる競技であった。つまり、効率性・利便性と適用範囲の広さにおいて、これら二つは産業社会における健康増進のための有力な武器として登場してきたのである。そして、こうした武器が食と余暇という勤務時間以外の異なる領域にほぼ同時に登場してきたことは、産業社会の生活時間の中で、健康維持のためにそれだけ勤務時間以外の時間の使い方が国民的規模で組織化されつつあった様子を物語っている。食とスポーツによって産業社会の国民の身体を救うという構図の出現は、身体最適化がそれだけ国民生活の根本に埋め込まれたことを意味しているのである。

IV 宗教の新たな役割

19世紀末にアメリカの食とスポーツに生じた変化は、産業社会を生き抜くために身体を最適化しようとする発想が、確実に国民生活を包み込んでいった様子を暗示している。しかしながら、ここで見落とせないのは、シリアルもバスケットボールも、その誕生の背後には宗教の影がちらついているという事実である。ケログはセヴンス・デイ・アドヴェンティストの熱心な信者であり、それが掲げていた菜食主義に傾倒していたし、バスケットボール発祥の地はキリスト教の布教を目的とした青年組織であるYMCAだった。宗教が密かに産業社会における身体最適化を支援する役回りを演じていたという経緯は、どのような意味を持っているのだろうか。

ここで、アメリカにおける宗教の変遷を改めて振り返ることは決して無駄ではないだろう。植民地時代初期のアメリカで強い影響力を持っていたピューリタニズムの遺産は、現在でも世俗化された形でアメリカ社会にその痕跡を止めている。しかし、純粋な宗派としてのピューリタンは、今日ではほとんど存在しない。つまり、アメリカ社会にいまだに大きな影響力を及ぼして

いるとはいえ、純粋な宗教の世界ではピューリタンはもはやアメリカの主役ではない。むしろ、ピューリタンに代わって18世紀半ば以降着実に勢力を拡大していったのは、いわゆる福音主義派なのである。

宗教勢力としてのピューリタンの影響力の衰退には、大別して二つの要因を考えることができる。一つは、ピューリタニズムの持つ厳格さが移民の世代が下がるにつれて宗派の存立そのものの足かせとなったことである。半徒契約の導入にも顕著なように、回心という啓示的体験の訪れない者は、熱狂的な宗教心が世代とともに衰えるにつれて増加していった。回心を経た成年男子のみを正規の教会員とするといった、選民思想の裏返しとしての排他的姿勢自体が、ピューリタンの勢力拡大を阻んだのである。もう一つの要因は、こうしたピューリタニズムの選民思想的側面とデモクラシーの理念との間の矛盾である。予定説に基づいて予め神に選ばれた者しか救われないというピューリタンの信仰体系は、アメリカが理想に掲げた万民平等というデモクラシーの発想とは根本的に矛盾する。神がごく一部の人間しか救わないとしたら、それは、人々が決して平等ではないことを意味していると考えられたとしても決して不思議ではないばかりか、人間は理性によって努力次第で幸福を切り開くことができるとする啓蒙思想の立場とも相容れないことになる。したがって、18世紀以降、この国が啓蒙思想を吸収しながらデモクラシーの理念の実現に向けて進み始めた時、アメリカはピューリタニズムに代わる、より民主的な教義を積極的に必要とするようになったといえるだろう。

実際、福音主義の興隆は、いわば宗教の世界における民主化現象として捉えることができる。神は一部の人間のみを救うのではなく、神の御心はあらゆる人間を救うことにあり、その福音をあまねく人々に届けなければならないとする福音主義の立場は、ピューリタンの選民思想とは対極の考え方である。と同時にここで注目されるのは、福音主義が、救いの実感を人々にもたらすことを重視している点である。自分も神に救われたのだと全ての人々に感じてもらうようにすることが肝要であるとするれば、それはある意味では、現世における救いの重視を意味しているといえる。

こうした福音主義の現世重視の発想は、現実の社会の中で人々が直面している困難を宗教の力で解決することで人々に救いの実感を与えようとするこ

とにつながる。産業社会への移行は、それまでの人々の生活環境を大きく変えるものであり、多くの戸惑いを生んだとすれば、その問題解決に協力し、現実の産業社会を生き抜くための健康支援という形で救いを人々にもたらすことは、福音主義の考え方とは決して矛盾しないのである。

産業社会の基盤の一つとなった科学の発展は、宗教の権威を揺さぶるものであり、科学の台頭は宗教の影響力を弱体化させてきたと一般には考えられている。しかし、19世紀後半のアメリカの場合、いわば現世の救いというべき実利に対して積極的な福音主義の影響力が宗教界では既にピューリタニズムをはるかにしのいでいた。そしてその福音主義は、科学が引き起こした産業社会という新たな現実を否定するどころか、産業社会の諸問題への解決策の提示によって人々を救うという新たな任務を発見したのである。

こうした科学と宗教との意外な協力関係を考える時、ケロッグの活動は新たな意味を帯びてくる。シリアルの医学的な効用を説くために、ケロッグは各地を巡回して五千回以上も講演した。その様子は、シリアルの福音を説く伝道師の説教のようでもあり、強固な教会組織の整備よりも各地を巡回して直接人々を救うことに情熱を傾けていた初期の福音主義派の牧師の姿を彷彿させる。科学と宗教の奇妙な接近は、社会的影響力の強い新旧双方の勢力が、産業社会における身体の危機という共通課題に取り組む中で、いつしか両者の境界すら曖昧にしていた様子を暗示する。

と同時に、産業社会を拒絶せず、むしろ積極的にコミットしていくという、宗教の側の戦略は、科学の台頭という現実に適応した、産業社会に相応しい宗教のあり方を宗教の側自身が模索していたことの表れでもある。それは、産業社会への宗教自身の「最適化」の努力であったともいえる。産業社会という新しい状況に乗り遅れてはならないという感覚は、人々を身体最適化へと走らせただけでなく、宗教のような既成の社会勢力までも時代状況への最適化へと駆り立てていたのであり、個人と社会の双方の次元を貫く形で最適化の欲望の再編成に成功したことこそ、産業社会への急速な移行がアメリカで展開していく結果を招いたと考えることができるのである。

V 結語

小論では、アメリカにおける産業社会への急速な移行の背後には、ある種の強迫観念めいた「身体の最適化」への欲望が渦まいていた可能性に着目し、それがどのようなメカニズムによって増幅されていたのかを論じてきた。身体を最適化しようとする発想が強まった背景には、南北戦争以来の公衆衛生運動の盛り上がりに通ずる、生命そのものが脅かされているという危機感に加え、社会進化論的な適者生存の原理の拡大解釈によって、社会への不適応と破滅とが強く結びつけられるようになったという事情があった。そして、そうした発想は、勤務時間以外の時間を効率よく健康増進に充てようとする気運をもたらし、それは食やスポーツという娯楽を健康増進のために役立てるという考え方を強化していった。規成の社会勢力である宗教がこうした営みを支援していたという事実は、産業社会という新しい状況に最適化しようとする動きがいわば社会全体を巻き込んでいたことを物語ると同時に、現に19世紀末におけるシリアルやバスケットボールに代表される食やスポーツの変革は、産業社会の中で置き去りにされかねない社会的弱者にも身体の最適化への道を開くものであった。このようにして、国民全体を効率的に産業社会へと最適化していこうとするベクトルは増幅されていったのであり、身体を最適化させねばならないという強迫観念は、いつしか身体の最適化を効率的に行なうメカニズムそのものを強化していったのである。

このようなフィットネス・シンドロームとでも呼ぶべき傾向は、今日のアメリカでも決して衰えてはいない。勤労者が健康維持のためにスポーツ・ジムに通ってフィットネスに汗を流す姿はごく日常的であるし、体調管理のための食品としてはもはやシリアルどころか無数の栄養補助食品が開発されている。現世における社会的問題に干渉しようとする宗教の姿は、性道德の問題をはじめとして、かえって強まっているし、いわゆるFBOによる社会福祉活動の幅も広がっている。産業社会への移行という新しい時代状況によって触発された危機意識と、それに是が非でも適応しようとする欲望は、その後のアメリカ社会にたゆまぬ最適化への欲望を生み出し続けていると見る事ができるのである。

とすれば、19世紀末から20世紀初頭にかけて現代アメリカの原型が出現しえたのは、産業社会への移行が達成されたからというよりは、その実態をより正確に表現するなら、産業社会を動かし続けるための最適化への欲望の効率的組織化にアメリカが成功したからというべきであろう。産業、食生活、娯楽、教育、軍事、科学、宗教といった異なる領域を連関させた最適化の欲望装置とでもいうべきメカニズムの構築こそが、急速かつ効率的に人々を産業社会に取り込み、破竹の勢いで産業社会の階段を駆け上がって行ったアメリカを支えていたと考えることができるのである。

- (1) 鈴木透、「時計、石鹸、星条旗：産業社会の出現とアメリカ的身体の形成過程」、羽田功編『民族の表象：歴史、メディア、国家』、慶應義塾大学出版会、2006年、p.155-189。
- (2) 19世紀末から20世紀前半にかけてのアメリカの公衆衛生運動の歴史については、Suellen M. Hoy, *Chasing Dirt: The American Pursuit of Cleanliness* (New York: Oxford University Press, 1995) を参照した。
- (3) 公衆衛生運動に対する広告の影響については、Juliann Sivulka, *Stranger than Dirt: A Cultural History of Advertising Personal Hygiene in America, 1875-1940* (New York: Humanity Books, 2001) 及び、Vincent Vinikas, *Soft Soap, Hard Shell: American Hygiene in an Age of Advertisement* (Ames: Iowa State University Press, 1992) を参照した。
- (4) Charlotte Perkins Gilman, *Women and Economics* (Boston: Small, Maynard and Co., 1898), p.58-75 を参照されたい。
- (5) この点については、別の機会に論じたことがある。鈴木透、「軍隊の影：スポーツ、レクリエーションと性的支配」、宮地尚子編『性的支配と歴史：植民地主義から民族浄化まで』、大月書店、2008年、p. 119-142。